

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・子ども同士が育ちあう居場所として、まずは、子どもが遊び込めるような環境(ゾーンを区切ったおもちゃの配置)整備を行った。しかし、保育所や幼稚園入所の早期化などにより、拠点の利用者は低年齢化していることから、子ども同士の関係性作りに難しさがある。 ・拠点の利用が短期間化している。だからこそ、この時期に地域につなげることや、利用者同士を結び付けることがより重要になる中、スタッフの声掛けや関わり方について再認識する必要がある。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		B	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		B	A
☆区内各地域の親子が集え、交流できる場を提供できている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【実績統計】

年間プレママ・パパ利用者数: 令和4年度74人 ⇒ 令和5年度131人
 プレママ・プレパパリピート率: 49%(2022/8/1~2023/7/31の来所者数51人その後6か月までの間継続率)
 年間父親の利用者数: 令和4年度1041人(保護者全体の10.7%) ⇒ 令和5年度1096人(保護者全体の10.8%)
 「0歳児はじめましての会」参加者数: 令和4年度118人 ⇒ 令和5年度240人
 アウトリーチ参加者数: 「おでかけ広場」令和4年度2,674人(0歳児293人) ⇒ 令和5年度3,541人(0歳児357人)
 「おさんぼはぐはぐプレイパークDEあそぼう」令和4年度91人 ⇒ 令和5年度200人
 【令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)】
 「はぐはぐの樹」を利用したことはありますか: 「利用している」「利用したことがある」49.2%
 (令和元年調査46.6%)
 「はぐはぐの樹」で利用したことがあるものは何ですか: はぐはぐの樹おでかけ広場31.8%
 (居住エリア別: 中村地区100%・六ツ川地区43.5%)

①【利用者の参加動機を促す工夫と対応】

・コロナ禍による入館制限の中、感染防止対策と利用者とのつながり作りの両立に迷い悩みながらも、温かく気さくな雰囲気づくりを心掛けた。新規来館者は常に受け入れできるよう枠を確保し丁寧な館内説明や他の利用者との交流が持てるよう働きかけた。また、拠点未利用者への利用のきっかけ作りとして「0歳児はじめましての会」を開始し、好評を得たため回数を増やした。
 ・入館者数が上限に達して制限がかかった場合には随時インスタグラムで発信し、来館が無駄足にならないよう配慮した。
 ・「プレママ会」への参加以外で来所されたプレママ・プレパパにも積極的な地域の情報提供、利用者カードを作って図書貸し出し、希望に応じて沐浴練習等を行うと共に、他の利用者との交流を促した。プレママ・パパの時に利用された方の約半数の方が出産後に交流スペースを訪れている。

②【多様な養育者への働きかけと工夫】

・「双子・三つ子」「トイレトレーニング」「外国人ママ・パパ」「シングルママ」などのテーマで交流・情報交換の場を設け、共通項のある養育者同士がつながる機会にした。ミニチラシなどを作成し、区にも配布を依頼した。
 ・「パパ限定!日曜はぐはぐ」を偶数月の第一日曜日に設定し毎回好評であった。回を重ねる中で参加者同士がリラックスして交流する姿が多くみられた。
 ・コロナ禍によるイベント・プログラムの開催制限への対策として「保育士相談」「保育園・幼稚園説明会」「再就職応援セミナー」などオンラインでの実施を試みた。講座形式のプログラムはある程度の参加があったものの、対話形式でのプログラムは思うように参加者が集まらず、制限緩和とともに徐々に対面に戻した。

③【ニーズ把握とその対応】

・「はぐミーティング」(注1)や「意見箱」から利用者の意見、要望を聞き取り「バースデー手形タイム」(注2)や「みんなの保活」(注3)など居場所運営に活かすことができた。また、毎年実施している利用者アンケートをもとにプログラムやスタッフの対応など見直した。

④【利用者の力が発揮された活動の広がり】

・絵本サポーター(注4)は定例会の他、年間4回「えほんのはなし」(注5)を発行、季節ごとに手作りポップを作ってオススメ絵本紹介をするなど積極的に活動した。

☆【アウトリーチの場の充実】

・区内5か所で「おでかけ広場」を毎月2回程度実施し、周辺の地域情報の提供や子育てサポートシステムの紹介を行った。「横浜子育てパートナーの出張相談」、歯科衛生士による「歯科相談」を設け、遊びの場としてだけではなく相談機能も充実させることができた。拠点から離れた場所での利用者数、0歳児の利用も増えている。

・「おさんぽはぐはぐプレイパークDEあそぼう」は拠点等で集合しスタッフと一緒に弘明寺公園へ行くようにして初めてでも参加しやすくなった。またプレイパークに参加することで、公園遊びの大切さを伝える機会になった。
注1:「はぐミーティング」拠点利用者から参加者を募り、はぐはぐの樹の運営について意見や提案を自由に話し合うプログラム。

注2:「バースデー手形タイム」月に2回、午前中に予約制で手形を取り、お誕生日ケーキの前で写真が撮れる場を設けた。

注3:「みんなの保活」保育園に通う子どもがいる保護者に保育園入園までの活動を記入してもらいファイリングしたもの。

注4:「絵本サポーター」拠点利用者有志によるグループ活動。月1程度の定例会の他、拠点利用の際に絵本展示棚の整備や他の利用者親子に読み聞かせを行っている。

注5:「えほんのはなし」絵本サポーターが「ともだち」「おくりもの・たからもの」などテーマに沿ってオススメ絵本を紹介する発行物。

評価の理由(区)

①【利用者の参加動機を促す工夫と対応】

個別支援ケースと拠点を訪問すると、暖かい雰囲気やスタッフの声掛けから継続利用につながった。また、定例会を通じ、把握した養育者の声をフィードバックしたことで「0歳はじめましての会」の見直しにつながった。新型コロナウイルス感染症流行時(以下、「コロナ禍」とする)は拠点の運営情報を乳幼児健診や赤ちゃん学級(注1)などの事業を通じて養育者に伝え、つながりが切れないよう働きかけをした。

②③【多様な養育者への働きかけと工夫】【ニーズ把握とその対応】

・母子手帳交付や両親教室などで把握した妊娠期のニーズを拠点と共有し、「プレママ会」の土曜開催回数を増やしたことで、妊娠期からの父の育児参加を促進することができた。

・「双子・三つ子」「外国人ママ・パパ」「シングルママ」などの交流会について母子訪問や乳幼児健診等の事業を通じて対象者に紹介したり必要時は同行するなどつなぐ支援をした。

・コロナ禍で減少した外国人居住者がこの2年で急増している。国籍も多岐にわたりコミュニティを持たない親子も多いため、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ(以下、「みなみラウンジ」とする)との連携がますます重要となる。

・「わかママ会」はSNSでのつながりを継続しているが、若年で出産した親子のニーズを確認し協議する必要がある。

④【利用者の力が発揮された活動の広がり】☆【アウトリーチの場の充実】

「おでかけ広場」は、拠点から離れた地区の保護者に対して積極的に参加を促した。また参加のきっかけづくりとして歯科衛生士による出前講座の開催を他課と連携して実施した。南区は3歳児の齲歯罹患率が高い傾向があるため、拠点と連携した効果的な取組が更に必要である。

注1:「赤ちゃん学級」区内11か所で保健師が月1回開催している生後2か月～1歳までの乳児とその養育者が集い、交流できる事業

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・「0歳児はじめましての会」は回数を増やした分、参加者数が伸びていることから、初めて拠点を訪れるきっかけになり、利用者同士の交流を促した。また、「パパ限定！日曜はぐはぐ」に来所された方はその後、平日や土曜の利用にもつながっている。

・地理的に拠点の利用が難しい層にも「おでかけ広場」は、はぐはぐの樹の出張開催場所として安心感を持って受け入れられている。定期開催される遊びの場で顔なじみのスタッフが親子を迎え入れることで、親しく気軽な相談先としても浸透している。

(課題)

・外国籍保護者への拠点周知の必要性はもちろんのこと、すでに拠点と繋がっている外国籍利用者についても潜在的なニーズをキャッチして課題解決に導けるよう、広く関係機関と連携・協力できる体制づくりを検討する必要がある。

・居場所全体のレイアウト・ゾーニングや遊具を見直して幅広い年代の子どもの遊びが誘発されるよう、また、乳児優先スペースでは利用者同士が言葉を交わしやすい距離感になるよう、さらに工夫する。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・スタッフの相談スキル向上については、子育て世代の抱える課題の把握、相談後のスタッフ振り返り、研修(内部、外部)等の機会で行っていく必要がある。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【実績統計】

	R3年度	R4年度	R5年度
ひろば相談	3334	3633	4265
個別相談	10	7	12

【定期開催プログラムの中で相談につながるもの】

専門相談	保育士 助産師 栄養士 保育・教育コンシェルジュ
当事者・経験者	「おしゃべりサロン 発達・療育」 「おしゃべりサロン ダウン症児育て」
対象限定	「プレママ会」 「0歳児はじめましての会」 「シングルママの会」 「外国人ママ・パパのための・・・」

【スタッフ研修】

- ・外部講師による講義 [メディアと子どもへの影響] [児童虐待の気づきと対応]
- ・区内常設子育て支援拠点との交換研修

【令和5年度はぐはぐの樹利用者アンケート】

「スタッフの対応は親しみやすく気軽に子育ての相談ができますか」:「はい」98%
 「スタッフや他の利用者との交流をとおして子育ての悩みや孤立感が減りましたか」:「はい」73%
 その他自由記載として、スタッフがあたたかい・話しやすい・安心など 12件

【令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)】

「子育ての困りごとの相談先」:全体では「はぐはぐの樹」が11%
 現在利用中の方の相談先としては、親族や友人に次いで はぐはぐの樹スタッフが上位
 「相談したことがない方、その理由は何ですか」:「相談するほどのことでもないと思うから」が76%

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

①-A 【身近な場所として気軽に安心して相談ができる場づくり】

- ・スタッフは日々の振り返りの中で相談内容を共有することによって、親子に寄り添い、それぞれの親子にできる限り適した形での対応を模索し、心掛けた。
- ・利用者を温かく迎え入れ、他愛のない日常会話を積み重ねることで信頼関係を築き、つづやきを掬いあげることによって養育者が抱える悩みや困難の聞き取りを行った。また、子育てパートナーと緊密な連携を図ることで、適切に専門相談につなげることができた。
- ・月1回の「ルームDEトーク」では予約制で個別相談を受け、これ以外にも日常的に相談を受けられることを、初来館時や折に触れて周知に努め、利用者の身近な相談先となった。
- ・養育者の就労時期がより一層早まり、親しい関係が築きにくくなった中で、ひろばでの相談の際、身近な先輩や地域をよく知る利用者を巻き込んで経験や情報を伝えてもらうことで、新たな関わりや支え合いが生まれるよう促した。

①-B 【つなぐ・支える・広がるプログラムの設定】

- ・専門相談は、対面個別形式または講座型形式にて開催し、拠点を利用しない層が出向ききっかけとなった。講師と細やかな連携を取ったことで、その時点でのピンポイントの困りごとのみならず、養育者が抱える背景を知るきっかけとなったり、それ以降の多様な相談に繋がるケースも少なからずあった。
- ・当事者を支えるプログラムではオンライン形式から、対面での座談会に形態を戻し、経験者をアドバイザーとして招いて、子育てパートナー及び相談担当スタッフがファシリテーターとして入る中で、闊達な情報共有が行われた。また、当事者が気持ちを吐き出し、共感が広がる場となったことで、複数回参加する養育者もいた。
- ・人とのつながりを持つことが分断されてしまったコロナ禍に親になった世代に向けて、妊娠期や0歳の早い時期から拠点を知って、利用できるようプログラムの告知にSNSを用いたり、開催日や回数を工夫することで多くの参加が得られ、継続した拠点利用につながった。

①-C 【アウトリーチの場での相談対応と拠点との双方向なつながり】

- ・区内5か所で「おでかけ広場」を月各2回開催することで、気軽な遊びの場で、地理的・年齢的に拠点から離れている層からの相談に対応することができた。相談が拠点を利用する動機となり、拠点・アウトリーチの場と多面的に親子を見守ることができた。

② 【様々な連携の強化】

- ・区との定例会議の場では、丁寧に報告を行うことで情報を共有し、その後のフォローにつなげた。寄せられる相談傾向を分析し、特殊な時代背景によって、これまでの常態が分断された中での拠点の役割について考えた。
- ・スーパーバイズや区内常設子育て支援拠点との交換研修を通じて、地域に共通する課題を共有し、学びを深めた。

評価の理由(区)

①【身近な場所として気軽に安心して相談ができる場づくり】【つなぐ・支える・広がるプログラムの設定】【アウトリーチの場での相談対応と拠点との双方向なつながり】

- ・乳幼児健診、個別支援等の事業を通じて必要な養育者へ拠点の相談機能を周知した。
- ・年代や区の特徴に配慮した多様な養育者と子どもを受け入れられるよう相談しやすい場になっているかを拠点と共に確認をした。
- ・令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)より、はぐはぐの樹を現在利用している人は困りごとの相談先として親族や友人に次いで「はぐはぐの樹スタッフ」と回答している率が多く、相談先としての認識が広がっている。今後は現在利用していない層の認知度も広げられるよう周知の工夫が必要である。

②【様々な連携の強化】

- ・区拠点定例会を活用し、養育者からの相談内容を共有した。また対応についての助言を行い、支援方針を共に検討し、支援を行った。継続支援が必要な相談の場合、必要時「相談連絡票」を活用し地区担当保健師、ケースワーカーへ情報共有を行った。その結果、地区担当がケースを把握するきっかけとなり養育者のフォローにつながることが出来た。今後もスムーズに支援を行っていけるよう連携を密にしていきたい。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・利用者支援事業との役割の違いをスタッフがより明確に理解することで、必要に応じて専門機関につなぐことができ、また居場所では親子を継続的に見守るなど、適切なすみ分けができた。
- ・日々の振り返りを子育てパートナーを交えて丁寧に行うことにより、スタッフの相談スキル向上につながった。
- ・区、相談担当スタッフ、子育てパートナーの三者で緊密に連携が取れたことにより、親子に多層的な関わりを持つことができ、より効果的な支援に結びついた。

(課題)

- ・「相談するほどのことではないから利用しない」という潜在的には悩みを抱える養育者に、気軽な相談先としての拠点の存在をどう知らせていくか、新たなアプローチの手段としての子育て応援サイトやSNSの活用も含め、区と協働して検討していきたい。
- ・子どもの発達に不安を抱える親が増えている現状から、療育センターなどの専門機関との相互理解を深め、タイムリーに相談につながるができるよう、検討する必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後も、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・拠点を通じて子育て情報を発信したい人への支援。拠点のInstagramや「南区子育てカレンダー」を活用し、地域の子育て情報が地域に届きやすい環境整備を継続していくとともに、南区の子育て情報が集約し定着するように、使いやすいツールを引き続き検討していく。 ・拠点の情報集約・提供の機能を、区役所内や関係機関に発信する。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	B
評価の理由(法人)			
(主なデータ) 【令和5年度はぐはぐの樹利用者アンケート】 「情報コーナーは、子育てに関する情報がわかりやすく提示されていますか」:「はい」 91.5% 【令和5年度おでかけ広場利用者アンケート】 「情報コーナーは、子育てに関する情報がわかりやすく提示されていますか」:「はい」 89.4% 【令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)】 「子育てに関する情報の入手は何かからしていますか」 友人・知人の口コミ 53.2%、インスタグラム 40.2%、キーワード検索 34.4% ホームページ(区・はぐはぐの樹) 31.1%、各施設の通信(紙の通信) 21.4%、地域の掲示板・回覧板 19.9% 【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)】 「拠点の各機能の認知度「情報収集・提供」について」:「知っている」 91.9% 「はぐはぐの樹へのメッセージ <情報発信について>」:「南区子育てカレンダー」は区内の関係施設のイベント情報を一括して地域の親子に伝えられる。SNSが使えない施設にとって拠点のインスタを通し、タイムリーに広報できるのはありがたい 【はぐはぐの樹Instagram】 令和2年5月23日開始 フォロワー数 338(令和3年3月)⇒616(令和4年3月)⇒953(令和5年3月)⇒1265(令和6年3月)⇒1313(令和6年5月) 【保育園・幼稚園口コミ情報ファイル】 情報シート合計枚数の推移 54(令和3年)⇒70(令和4年)⇒91(令和5年)			

①【情報収集・提供の工夫】

- ・はぐはぐの樹だよりを毎月約2,700部を発行している。区の事業や区内の公共施設、子育てサロン、各駅のPR BOXで配布、拠点に来所が難しい利用者向けに「おでかけ広場」各会場にも情報コーナーを設置した。
- ・情報コーナーはカテゴリー別（遊び・仕事・預ける・相談・その他）に分け、それぞれに見出しを付けた。新たに新着情報コーナーを設置し、見やすく手に取りやすい配架をした。
- ・かねてより要望の高かった「南区幼稚園・認定こども園一覧」を幼稚園協会の協力のもと作成、拠点及び親子のつどいの広場、子育てサロンなどで配布し好評を得た。

②【情報の集約・提供の拠点であることの周知】

- ・「南区子育てもっとネット」会議(注1)でPR、各スタッフや横浜子育てパートナーが地域に出向いた際には、チラシや情報の提供を依頼し、拠点にチラシなどを配架できることを周知した。
- ・井土ヶ谷保育園の育児支援専任保育士の紹介により、「南区子育てもっとネット」に参加していない保育園にも「南区子育てカレンダー」(注2)入力マニュアルを送付し、多数の入力を得てカレンダーの内容の充実につなげることができた。

③【情報収集や発信への養育者や担い手の関わり】

- ・Instagramのフォロワー数が1300人を越え、周知ツールとして定着した。子育てサークル、地区センター、保育園などアカウントを持たない団体に拠点のInstagramで発信できることを伝え、代行で投稿を行った。
- ・利用者有志のはぐはぐgrammerによる当事者目線での発信や絵本サポーターによるおすすめ絵本の紹介などがフォロワー数増加につながった。今後も活動の継続方法を検討していく。
- ・「はぐミーティング」参加者のアイデアからスタートした園選びに役立つ口コミ情報ファイルを保育園と幼稚園に分けて配架した。また、保育園の入所が決まった利用者からは保育園探し活動についての口コミも集めてファイルにまとめた。

注1:「南区子育てもっとネット」安心して子育てできる南区を創るため、地域の子育て力を高めることを目的としたネットワーク。南区で乳幼児親子への支援事業を行っている施設・団体・関係機関が参加している。平成21年度発足。

注2:「南区子育てカレンダー」はぐはぐの樹ホームページ内にあり、南区の子育て関連の催しを掲載するカレンダー。各団体がログインして入力できるようになっている。

注3:「はぐミーティング」利用者から参加者を募り、はぐはぐの樹についての意見や提案を自由に話し合うプログラム。

評価の理由(区)

①【情報収集・提供の工夫】

- ・区役所に拠点の情報コーナーを設置した。あわせて紹介用DVDを放映することで拠点情報を周知した。また、「こんにちは赤ちゃん訪問」(注1)「赤ちゃん学級」「両親教室」などの事業を通じて拠点情報の周知を行った。
- ・拠点と区で協働し「南区子育て応援マップ(おひさまだいすき)」を作成し窓口や乳幼児健診、こんにちは赤ちゃん訪問等で配布、周知した。
- ・令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)より、子育て支援関係者の情報収集・提供機能の認知度は9割を超えている。そのうち6割近くは子育て世代に紹介したことがある、または自身も関わっていると回答していた。担い手の認知度や周知していく当事者としての役割意識が半数以上にみられた。今後は認知度の更なる向上のため周知方法や機会について検討していく。
- ・「南区子育てカレンダー」について育児支援専任保育士と協力し参加団体を拡大し、情報拡充を図った。今後「横浜市子育て応援サイト」と子育てカレンダーの運用について検討が必要である。
- ・子育て関連の事業や情報を拠点で発信できることを区役所他課へ周知した。
- ・区内の子育て支援関係者が集まる「もっとネット会議」やこんにちは赤ちゃん訪問員(注1)の定例会の場を利用し、区民と接する機会が多い担い手へ拠点の幅広い情報集約・提供機能を周知した。

②【情報の集約・提供の拠点であることの周知】

- ・拠点の情報収集・提供機能について、子育てサロン従事者やこんにちは赤ちゃん訪問員等の子育て支援関係者に区民への周知を依頼した。

③【情報収集や発信への養育者や担い手の関わり】

- ・子育てサロン・地域ケアプラザ等の関係団体に向けて、拠点にてチラシ、ポスター掲示ができることを拠点から積極的に伝えていけるよう支援した。

注1:「こんにちは赤ちゃん訪問」出産早期の子育て家庭に地域の訪問員が訪問し、子育て支援に関する情報提供を行う事業(乳幼児家庭全戸訪問事業)

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・Instagramを始めたことにより、周知の可能性が広がった。はぐはぐの樹の入館制限情報や地域のイベント情報をタイムリーに発信することができ、コロナ禍の中でも支援場所に出向くきっかけを作ることができた。
・井土ヶ谷保育園の育児支援専任保育士との連携により南区子育てカレンダーに inputs する保育園が増えて、内容の充実につながった。また、南区幼稚園協会の協力により念願の「南区幼稚園・認定こども園一覧」を発行することができた。

(課題)

・拠点を利用していない人や支援関係者、区役所こども家庭支援課以外の課に拠点の情報収集・提供機能をまだまだ周知できていないと感じている。特に保育園・幼稚園に関する情報などを区役所と拠点でもっと共有していきたい。
・子育て情報を発信・集約できるより使いやすいツールを引き続き検討し、子育て応援サイト・アプリ「パマトコ」や「横浜市地域子育て拠点サイト」のより良い活用法も模索していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	身近なエリアでの具体的な取り組みを、南区内のすべてのエリアで進めていきたいが、エリアによって働きかけが難しいところもある。エリア内の子育てにかかわる人とのつながり方や、継続的な取り組みを後押しできるネットワークの推進をどのようにしていけばよいのかを検討していく。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【令和5年度第2回もっとネット全体会議参加者アンケート】

「本日のもっとネット会議はいかがでしたか」:「とても良い」59.3%、「良い」37.0%(回収率67.5%)

感想コメント:「コロナ後それぞれが試行錯誤しながら運営している事が良くわかりました。私達がやっていない事は取り入れてみたいと思います。」

【事業実績】

まちのほっとスペーススタンプラリースタンプポイント(参加支援場所)数

令和元年度89か所 →令和4年度86か所 →令和5年度92か所

【まちのほっとスペーススタンプラリー参加者・支援場所アンケート】

参加者コメント:「初めてだと行くのに少し緊張しますが、スタンプラリーがあることで気兼ねなく行けて良かった」「このスタンプラリーのお陰で作業所にパンを買いに行くきっかけが出来て行動の幅がさらに広がりました」

支援場所コメント:「地域を知る良い機会になっていると思う」「スタンプラリー目当てで来た方が継続して来ている」

【令和5年度はぐはぐの樹利用者アンケート】

「はぐはぐの樹を利用することであなたの子育てに変化はありましたか?」:「地域の人と知り合う機会が増え、地域を身近に感じられるようになった」令和4年度57.0% → 令和5年度65.5%

【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)】

「ネットワーク作りに自身が参加したことがある」:子育て支援関連団体・施設スタッフ69.2%、地域ケアプラザ60.0%

「「はぐはぐの樹」に期待すること(自由記載)」:「現場スタッフ同士で話せる場/交流/情報の共有、交換があるとよい」「これからも区の子育て支援を一緒に盛り上げていきたい」

①【活動を支え合い・高め合うネットワーク作り】

・南区子育てもっとネット(注1)ではコロナ禍においても関係性が途切れないよう、年2回の全体会議をオンラインや地域ケアプラザの協力によるハイブリッドなど新たなスタイルを積極的に取り入れて継続して開催した。対面で開催できるようになってからは、参加したいトークテーマを事前に把握してグループ分けする等の工夫で参加満足度の高いネットワーク会議になった。

・南区内5か所の常設の子育てひろばとのネットワーク「みなともネットワーク」を新たに発足させ、児童虐待防止キャンペーンに協力して取り組むとともに、スタッフ合同研修会やメーリングリストを活用したイベント等の相互周知協力等で日常的な連携を進めた。

②【再開した地域の支援場所へのつなぎ直し】

・「まちのほっとスペーススタンプラリー(注2)」は2年間中断したものの、再開後は参加者が大幅に増加したので、再開してから参加者が戻らない状況にあった地域サロンへの大きな後押しとなった。また、スタンプポイントになり得るところに積極的に声をかけて子育て分野以外からの参画も得ることができた。

・拠点所在地の地区社会福祉協議会が実施するイベントに参加協力することで、子育て世代が地域行事に参加するきっかけになった。

注1:「南区子育てもっとネット」安心して子育てできる南区を創るため、地域の子育て力を高めることを目的としたネットワーク。南区で乳幼児親子への支援事業を行っている施設・団体・関係機関が参加している。平成21年度発足。

注2:「まちのほっとスペーススタンプラリー」南区子育てもっとネット参加施設・団体が開催している支援会場や地域イベントへの乳幼児親子及び妊婦の参加促進を目的とした催し。規定枚数を集めると、地域作業所のショップで小物やお菓子等と交換できる。

評価の理由(区)

①【活動を支え合い・高め合うネットワーク作り】

・「南区子育てもっとネット会議」では区が把握した地域活動の課題や先進的な取組等を共有し、活動の存続や活性化、地域のつながりづくりに視点を置いたテーマを設定し協働して実施してきた。
 ・コロナ禍には全ての地域活動が休止に追い込まれたが拠点や南区社会福祉協議会(以下、南区社協)と共に支援を行い、地区社協主催の子育てサロンは全て再開することができた。
 ・「みなともネットワーク」はオレンジリボンキャンペーンを機に発足。区は母子保健事業等の情報提供や研修講師の調整を行った。また、区が把握したつどいの広場の課題について共有し、解決にむけて検討した。
 ・区内には中学生までを対象とした居場所活動が約30か所あり、その活動を支援する「子どもの居場所づくりネットワーク」を実施している。拠点もネットワークに参画し地域状況を把握すると共に居心地の良い居場所づくり等についてアドバイスし、団体活動の質の向上につながった。
 ・令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)結果では、連携先として区役所、区社協、地域ケアプラザが上位に位置している。地域活動を活性化するため各機関の強みを生かしつつ連携した支援を検討していく必要がある。

②【再開した地域の支援場所へのつなぎ直し】

・「まちのホットスペーススタンプラリー」では、両親教室や赤ちゃん学級などの事業を通じて積極的に参加をすすめた結果、妊娠期からの参加者増加につながった。
 ・個別支援では親子のニーズにあった身近な地域の子育て支援活動につながるよう、情報提供だけでなく同行訪問をするなど丁寧な支援を行う中で活動の課題把握に努めた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・コロナ禍により中止を余儀なくされた地域の支援場所に対し、子育て家庭を取り巻く状況とその変化を伝え、感染防止対策と両立させる具体的なノウハウ交換の機会を設ける等、その活動の意義を再確認するとともにモチベーションが維持できるよう様々な形での支援を続け活動再開を後押しすることができた。
 ・みなともネットワークでは一つの事業と一緒に取り組むことによって連帯感を深めると共に、取り組み内容や進め方を工夫して、代表者だけでなく各施設のスタッフ同士が交流し学び合う機会になった。

(課題)

・外国人養育者の増加に伴い、支援を要する要因とその対応が多様化していることに対して、地域の支援場所でのどのような支援が可能かを検討する場・機会が必要になっている。
 ・地域の支援場所で把握した気になる親子が、拠点からスタッフが出向いた時にやっとながることがあるので、様々な機関につなぐことが出来るという拠点の機能を理解してもらい、日常的に気になったことを伝えてもらえるようにしていく。
 ・現在のネットワークのつながりを利用して、「親と子のつどいの広場見学会」の実施など新たな連携の在り方を模索する必要がある。

振り返りの視点

- ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。
- エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	地域の子育てサロン等に対して、担い手となるボランティアを発掘・育成する、広報周知の方法について学ぶ機会を設けるなどのサポートを、さらに多くの地域ケアプラザや区社会福祉協議会と連携して行っていけると良い。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)】 「拠点の各機能の認知度「人材育成」について」:「知っている」80.0% (令和元年度68.2%) 「はぐはぐの樹」に期待すること・メッセージ(自由記載):地域の学校との交流会は次世代との相互理解が深まり素敵な企画だと思う</p> <p>【令和4年度支援者向け講座(「初対面でも相手が安心して思いが話せる聞き方・話し方」)参加者アンケート】 「本日の内容はいかがでしたか?」:とても満足 86.4%、満足 13.6%(回収率88%) 「コメント(自由記載)」:「いつも興味深い講座を企画してくださりありがとうございます。即興のグループワークが成立するのも、子育てにかかわる支援者ならではのしょうか。皆さんとお話しできたのも、とても良かったです。」 「広場スタッフとして働き始めたばかりだったので、今回このような講座が受けられてとてもよかったです。聴くことの大切さを感じました。」</p> <p>【令和5年度はぐはぐの樹利用者アンケート】 「はぐはぐの樹を利用することであなたの子育てに変化はありましたか?」:子育て中だからできることをやってみよう、やってみたいと思うか「はい」78.5%</p> <p>【事業実績】 子育てサークル登録数:令和元年度9団体 ⇒ 令和6年度3団体 看護実習・インターンシップの大学生受入のべ人数:令和3年度52人 ⇒ 令和4年度55人 ⇒ 令和5年度88人</p> <p>【絵本サポーターの活動】 活動開始:平成28年 「えほんのはなし」(注)発行開始:令和3年6月、令和6年4月までに10号発行</p> <p>注:「えほんのはなし」 拠点利用者有志によるグループ活動「絵本サポーター」が「ともだち」「おくりもの・たからもの」などのテーマに沿ってオススメ絵本を紹介する発行物。</p>			

①【支援者のニーズに合った講座・研修】

- ・支援者向けの講座は、「アンガーマネジメント」「承認」「ジェンダー」「傾聴」「障がい理解」「ステップファミリー」等、ネットワークを通じて把握した支援関係者のニーズや拠点での相談内容からテーマを選んで実施した。新型コロナウイルス感染再拡大の場合でも開催できるようにオンラインやハイブリット形式を採用し、スキルアップの機会の保持に努め好評を得た。
- ・子育て支援関係者向けの広報紙「にこで」には研修会やネットワーク会議の報告、様々な地域の支援場所の紹介、新しい支援施策の説明等を掲載し、担い手一人一人に情報を届け、活動に活かしてもらうことを意識して発行した。
- ・南区内の5か所の常設ひろばと協力してスタッフ合同研修を実施した。ひろば見学と交流会、オンラインの情報交換会、スタッフ交換研修と様々な形式で行い、より多くのスタッフの参加を叶えることができた。

②【当事者が力を発揮できる支援】

- ・絵本好きの利用者がプログラム参加をきっかけに結成した「絵本サポーター」は、オススメの絵本を紹介する情報紙「えほんのはなし」の発行を開始するなど活動の幅を広げた。
- ・子育てサークルについてはメンバー募集や運営についての相談を受けPR協力などの支援を行ったが、継続できなくなるサークルが相次ぎ登録数が減少した。

③【区民向け啓発の再考】

- ・多くの区民が参加する地域行事「南なんデー」「みなみ桜まつり」に出展参加し拠点事業をアピールした。また、地区社協主催のウォークラリーイベントではラリーポイント・参加賞交換場所として協力した。
- ・コロナ禍により開催を見合わせていた区民向け講演会については、その後再開できていない。

④【中高大学生との交流の拡大】

- ・横浜国大付属横浜中学校3年生の家庭科の授業の一環での交流会はコロナ禍でも途切れることなく実施することができた。令和5年度からは会場を中学校内に移したことで時間に余裕ができて、より充実した交流になった。
- ・近隣の横浜総合高校のキャリア教育の一環で、拠点が提示した地域課題について高校生が解決策を提案するという取り組みに協力した。その中から「はぐはぐ体操」が生まれ、現在も「おでかけ広場」の中に取り入れている。
- ・大学・専門学校(主に看護学生)の実習の依頼が増え、できる限り受け入れた。利用者も妊娠・出産の体験談を語ったり、質問に答えたり、積極的にかかわる姿が見られた。

注1:「南区子育てもっとネット」安心して子育てできる南区を創るため、地域の子育て力を高めることを目的としたネットワーク。南区で乳幼児親子への支援事業を行っている施設・団体・関係機関が参加している。平成21年度発足。

評価の理由(区)

①【支援者のニーズに合った講座・研修】

・支援者向け講座等は、内容に合わせて対象者に周知し参加に結びつけることができた。
 ・子育てサロンはコロナ禍以降、利用者が減少している。サロン参加への壁を低くする取組として保健師がサロンに出向いたり、赤ちゃん学級で地域サロンスタッフと交流するなどの取り組みを行った結果、参加者の増加につながった。また、サロンに出向いた際には親子への対応方法などの相談を受けた。あわせて、ボランティアの高齢化に伴う活動衰退の危機については区全体の地域課題として、区役所や区社協、地域ケアプラザ等にも提起した。

②【当事者が力を発揮できる支援】

・赤ちゃん学級の参加者に地域とのつながりの大切さを伝えている。実際、卒業生からは子育ての仲間やボランティア、地域ケアプラザのスタッフ等とつながることで、安心して充実した子育てができているという声が聞かれている。
 ・保育園利用者の増加や養育者の地域離れなど、地域の子育て支援に関する現代の養育者のニーズを把握し検討していく必要がある。

③【区民向け啓発の再考】

・南区には子どもの居場所活動や外国につながる子どもの支援を行う団体も多くあるため、様々な活動や支援者につながることで子育て家庭への理解を深め、重層的な子育て支援の仕組み考えとともに啓発を再考している。

④【中高大学生との交流の拡大】

・区で実習する大学生や看護学生が赤ちゃん学級や子育てサロンなどに参加し、子育てや地域のつながりについて考える機会を提供した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・コロナ禍においてもオンラインを活用して支援者向けの講座を開催し続けた。子育てに関する様々な課題に向き合うテーマ選び、講義だけでなく参加者同士が学び合えることに力点を置いて企画したことで、充実したスキルアップの機会を提供することが出来た。
 ・中・高・大学生との交流の機会や実習受け入れは、学校に積極的にアプローチした上で、感染防止対策にも配慮した丁寧な打合せを行うことで質・量ともに向上させることが出来た。

(課題)

・今後、地域で支援にかかわる人材の掘り起こしでは、広く区民を対象とし地域ケアプラザや区社会福祉協議会等と連携した取組を進めていく必要がある。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)																					
		法人	区																				
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・区境など提供・両方会員の少ない地域への会員増の働きかけ方の検討、新たな周知先の発掘が必要である。	B	B																				
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A																				
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A																				
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A																				
評価の理由(法人)																							
<p>(主なデータ)</p> <p>【令和5年度実績統計】 総会員数:610人(利用500人 提供会員83人 両方会員27人) 入会説明会:交流スペース 12回 58人・つどいの広場等 26回 97人 /個別入会説明 64人 総参加数 219人</p> <p>【実績の推移】</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>令和3年</th> <th>令和4年</th> <th>令和5年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>新規入会者数</td> <td>62</td> <td>130</td> <td>205</td> </tr> <tr> <td>依頼件数</td> <td>124</td> <td>175</td> <td>229</td> </tr> <tr> <td>事前打合せ同席数</td> <td>95</td> <td>110</td> <td>137</td> </tr> <tr> <td>活動件数</td> <td>899</td> <td>1089</td> <td>1268</td> </tr> </tbody> </table> <p>【はぐはぐの樹利用者アンケート】 「子育てサポートシステムを知っている」:71.5% (うち、今後会員になろうと思っている 24.5%)</p> <p>【令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)】 「子育てサポートシステムを知っている」:(保護者) 62%</p> <p>【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)】 「子育てサポートシステムを知っている」:(支援者) 83%、紹介したことがある 45.9%</p> <hr/> <p>①【広く区民が参画するための工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流スペース、区内つどいの広場等で曜日を変えて定期的に集団・出張説明会を開催した。 ・年間の入会説明会スケジュールを裏面に掲載した周知チラシを区の乳幼児健診等で広く配布した。また、通常の周知チラシに加え、「幼稚園保護者向け」「保育園保護者向け」「新一年生保護者向け」など、対象者を絞ったチラシを作成し、区内関係各所に配架・配布を行った。 ・こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会に出席し、事業や援助活動の現状説明等を行い、会員拡大のための周知協力を依頼した。 ・区支部発行のニュースに「提供会員募集」を定期的に載せることで、利用会員が両方会員に興味をもったり、また提供会員からの紹介で予定者研修の受講につながった。 <p>②【様々なニーズへのアプローチ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「シングルママの会」開催時に希望者に入会説明をする際には「横浜子育てサポートシステムひとり親家庭等支援事業」の説明も行い、対象者の利用に結び付けよう働きかけた。 ・個別入会説明は緊急の場合だけでなく、体調不良等で外出が難しい場合に自宅に訪問したり、フードパントリーイベント(注1)の際に行ったりと、タイムリーに、またニーズに沿った対応を心掛けた。 ・区役所の地区担当保健師や権利擁護担当職員同行で家庭に訪問して入会説明を行い、迅速な利用につなげることができた。 ・「はぐはぐの樹だより」に横浜子育てサポートシステムのコーナーを毎月掲載し、横浜子育てサポートシステムの入会説明会の日程を周知した。 					令和3年	令和4年	令和5年	新規入会者数	62	130	205	依頼件数	124	175	229	事前打合せ同席数	95	110	137	活動件数	899	1089	1268
	令和3年	令和4年	令和5年																				
新規入会者数	62	130	205																				
依頼件数	124	175	229																				
事前打合せ同席数	95	110	137																				
活動件数	899	1089	1268																				

③【丁寧なコーディネートと会員フォロー】

- ・新規事業(利用料の引き下げや「子サポdeあずかりおためし券」配布)の効果もあり利用会員数が急増した。それに伴って依頼件数も増えたため、提供・両方会員の負担にならないようなコーディネートをしながらも、無理のない範囲で活動数を増やしてもらえるようにも努めた。また、しばらく提供活動のない会員にも積極的に声掛けをし、活動を復活してもらえるよう働きかけた。
- ・新規事業(提供・両方会員への給付金)や横浜市地域子育て支援拠点サイトへの移行といった大きな仕組み変更については、集団説明会を開催したり、個別の説明を行ったりと、提供・両方会員がスムーズに活動できるようにフォローを行った。
- ・援助活動の依頼については、オリジナルのアプローチシートを活用することでコーディネーター間の情報共有を行い、利用会員・提供会員双方に最善の提案ができるよう心掛けた。
- ・事前打合せは会員同士が信頼関係を築けるような雰囲気づくりや、確認項目の配慮を行った。また、必要に応じて援助活動の様子を確認するなどのフォローを行った。
- ・提供・両方会員には保育グループ「ぐるんぱ」(注2)への参加を勧め、会員同士の仲間づくりや、活動機会の増加につなげてモチベーションアップができるよう努めた。

④【他の機能・機関と連携した支援】

- ・依頼内容に応じて他の支援(保育・教育コンサルジュ、一時保育・預かり、産前産後ヘルパー派遣事業等)の情報提供や、横浜子育てパートナーの紹介を行った。依頼の段階で連携する必要が想定される相談者については、横浜子育てパートナー同席で丁寧な面談をしてコーディネートをを行い、その後も必要に応じた情報共有を行った。
- ・依頼内容や援助の様子を確認等から、専門的な支援が必要と思われる相談を把握した際は、区にスムーズにつなぐことができた。
- ・区役所の乳幼児検診、赤ちゃん学級、親子あんしん見守り事業、里親関連団体主催の研修、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジからの依頼で日本語教室時の保育等、保育グループ「ぐるんぱ」が多方面で広く援助活動を行った。

注1:「フードパントリーイベント」フードバンクNPOと共催で主にひとり親家庭を対象に食品や日用品・衣類等を提供している。拠点事業外の自主事業として月1回開催。

注2:「ぐるんぱ」南区の横浜子育てサポートシステム提供・両方会員による一時保育を行うグループ。拠点が実施する講座などの保育を中心に子育て支援関連事業での保育依頼を受けて活動中。現在メンバー17名。

評価の理由(区)

①【広く区民が参画するための工夫】

- ・広報よこはまへの掲載とあわせ、こんにちは赤ちゃん訪問事業、児童扶養手当受給者等に対し周知を行った。あわせて小学校と連携し新入生学校説明会でもチラシを配布した結果、新たな会員登録につながった。
- ・「令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)」結果で、「居住年数の1年未満」の認知度が低いことが判明したため更なる周知方法の工夫が必要である。
- ・「令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)」結果で、「知らない」と回答した者は保育園関係者や主任児童委員の割合が高かった。養育者からの相談を受ける立場にあるため認知度を上げる取組が必要である。

②【様々なニーズへのアプローチ】

- ・「子サポdeあずかりおためし券」ができ、母子手帳交付時等に丁寧な説明をした結果、利用会員の登録につながった。また、個別支援では情報提供をするだけでなくコーディネーターと連携し迅速な利用につながることができた。
- ・利用会員が増える一方で、提供会員の不足等からコーディネートが成立しない状況もみられたため、提供会員の募集に関する取組を他課と連携して実施した。今後も区だけでなく他機関と連携した取組を検討する必要がある。

③【丁寧なコーディネートと会員フォロー】

- ・利用会員からは提供会員への信頼や感謝の声が聞こえる半面、養育支援家庭など配慮を要す利用者も増えているため、区保健師や社会福祉士と連携・協力して効果的な支援となるよう取り組んだ。

④【他の機能・機関と連携した支援】

- ・専門的な支援を必要とする養育者を把握した場合には、区役所とともに課題を整理し、役割分担しながら対応にあった。結果として、養育者にとって迅速で切れ目のない支援につなげることができた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・継続的かつ目的別に広く周知を行った。利用料の改定、「子サポdeあずかりおためし券」配布の効果もあり、利用会員、依頼数が急増したが、依頼内容や状況を丁寧に聞き取って提供会員につなげていくことで、双方にとって円滑な援助活動を行うことができた。
- ・専門的な支援が必要とされるケースも多くある中、会員の悩みやニーズを受け止め、区の担当者や子育てパートナーとも適宜情報共有して役割に応じた支援に結びつけることができた。

(課題)

- ・今後、さらに依頼数が増加すると予想される中で、提供・両方会員の拡充は喫緊の課題である。また、利用会員の中には民間のサービスと同じように捉える方が一定数いて、提供会員との意識の差が生じていることなど、利用の広がりとともに、地域の支え合い活動であることの良さをどう伝えていくかが問われている。「子育てサポートシステム」だからこそできる支援について整理が必要である。
- ・外国籍の方がスムーズに利用にできるよう多言語での説明資料等の整備、提供会員を増やすために新たな周知先を見つけることも課題である。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。
- カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。
- キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。
- ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)
- コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。
- サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・個別支援を通して把握した課題について、関係機関との連携を取る際に丁寧に伝えて共有したり、解決策を提案するなどしたが、具体的な支援につなげることができなかったこともあった。子育て家庭が抱える不安や求める支援について関係機関に発信し拠点の他事業とのつながりを生かして、不足する資源の発掘に取り組んでいく。 ・南区子育てもっとネット関連団体と顔の見える関係はできているが、まだ、つながりが薄い幼稚園や地域ケアプラザとも連携がとれるようにする。	B	A
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【はぐはぐの樹交流スペース利用者アンケート】

「横浜子育てパートナーを知っていますか」(「知らない」「不明」以外の合計): 令和4年度「知っている」65.5%
 ⇒ 令和5年度「知っている」75.5%

【はぐはぐの樹おでかけ広場 利用者アンケート】

「横浜子育てパートナーを知っていますか」(「知らない」「不明」以外の合計): 令和4年度「知っている」80.4%
 ⇒ 令和5年度「知っている」90.9%

【令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)(有効回答票数453票)】

「横浜子育てパートナーを知っていますか」:「知っている」38.2%、(前回令和元年度調査「知っている」35.7%)2.5%微増

【令和5年度南区子育てアンケート(支援者向け)(有効回答数135票)】

「横浜子育てパートナーを知っていますか」:「知っている」83.7%、(前回令和元年度調査「知っている」80.8%)2.9%微増

【事業実績】

相談件数	新規	継続	面接	電話	出張	オンライン	合計
令和3年度	198	218	265	75	76		416
令和4年度	177	278	322	52	80	1	455
令和5年度	197	277	330	54	88	2	474

令和5年度出張相談回数: 地域子育てサロン12回、おでかけ広場10回、親と子のつどいの広場13回
 みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ2回 計37回

【連携した関係機関】

こんにちは赤ちゃん訪問員、主任児童委員、子育て支援者、障がい児・者の将来を考える会 泉の会、ひとり親サポートよこはま、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ、南区社会福祉協議会(移動情報センター)、児童家庭支援センター、他区横浜子育てパートナー、横浜型医療的ケア児・者等コーディネーター、フードバンク浜っ子南、中央児童相談所、児童発達支援事業所、保育園

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

①【妊娠期及び子育て家庭・支援関係者に向けての周知活動】

- ・区内幼稚園・保育園の在園児保護者に向けて横浜子育てパートナー（以下子育てパートナー）のチラシを配布し幅広く周知した。
- ・区の両親教室や妊娠期のプログラム（プレママ会）で子育てパートナーを紹介し、妊娠期から相談先として認知してもらうよう案内した。
- ・こんにちは赤ちゃん訪問員・子育て支援者・主任児童委員の各定例会で子育てパートナーの役割や相談事例を伝えて紹介してもらえるように依頼し、出張先等で相談者をつないでもらうこともあった。
- ・おでかけ広場や地域の支援場所への出張相談では拠点を利用したことがない親子にもかかわることができ、ニーズに合わせて拠点のプログラムを紹介して利用につなげた。また出張先で得られた地域情報や利用者からの生の情報などを拠点スタッフと共有し支援に活かすことができた。
- ・新たにオンライン相談を取り入れて拠点から離れた地域の方や来所が難しい方に対応できるようにし、対応した3件とも拠点から離れた地域の方の利用だった。

②【相談者の主体的な選択を尊重する傾聴姿勢】

- ・じっくりと話を聴く姿勢を大切に相談者が安心して相談ができるように対応し、ニーズを把握して適切な情報提供や関係機関を案内した。また相談者が主体的に選択できるように親子に寄り添い続け、親子が成長していく姿を見守ることができた。
- ・子育てサポートシステムと連携し、つないだ相談者の状況把握を互いに行ってスムーズに支援できるようにした。
- ・居場所・相談のプログラムから参加者のニーズを把握して個別相談につなげたり、相談内容からプログラム参加を促すなど拠点の機能を活かした支援を行った。
- ・専門的な支援が必要な相談については、役割分担を意識し区の支援を紹介した。区につながった後も拠点内では継続して見守りを行い、会議の場等で情報共有をした。

③【関係機関との協働の関係づくり】

- ・「みなみ市民活動・多文化共生ラウンジ」とは外国人親子を対象にしたアウトリーチのプログラムの共催を通じて関係が深まり、情報共有や個別相談、さらに日本語教室に新たにつける一時預かりのコーディネートへとつながった。
- ・フードパントリーイベント(注1)では、ひとり親家庭との接点を持ち、身近な相談窓口として認知されるように関わって、必要な情報提供や仲介を行った。

注1:「フードパントリーイベント」フードバンクNPOと共催で主にひとり親家庭を対象に食品や日用品・衣類等を提供している。拠点事業外の自主事業として月1回開催。

評価の理由(区)

①【妊娠期及び子育て家庭・支援関係者に向けての周知活動】

- ・こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、両親学級などの事業を通して利用者支援事業について区民に広く周知した。令和5年度南区子育てアンケート(保護者向け)結果より、養育者の子育てパートナー認知度は38.2%と5年前の同様のアンケートと比較するとやや上昇しているものの約4割に留まっている。利用者からは「はぐはぐの樹タッフ」と「子育てパートナー」が明確に分けて認知されていない可能性が考えられる。「3.相談事業」で触れたようにはぐはぐの樹利用者からスタッフは相談先として認知されているため、子育てパートナーを含めたスタッフへの相談機能は認知されてきていると考える。

②【相談者の主体的な選択を尊重する傾聴姿勢】

- ・区拠点定例会を活用し、養育者からの相談内容を共有した。継続支援が必要な相談やについて、望ましい対応を検討し、役割分担しながら支援した。また、急いで対応が必要な場合は地区担当保健師が子育てパートナーより直接報告を受けスムーズに連携を取ることができた。今後も情報共有等の連携を密に行っていきたい。

③【関係機関との協働の関係づくり】

- ・子育てパートナーが関係機関の定例会に出向き、顔が見える関係づくりができるように調整を行った。
- ・子育て包括支援センターの年間振り返りとして年度末に母子保健コーディネーター、保育・教育コンシェルジュ(注1)で情報共有を行う機会を設けることが出来た。保育園情報など利用者のニーズが高い情報について意見交換を行えた。また区拠点定例会に母子保健コーディネーターも参加し情報共有の場を設けた。より良い共有の場とするため共有事項について検討が必要である。

注1:「保育・教育コンシェルジュ」 就学前の子どもの預け先に関する保護者の相談に応じ、保育サービス等について情報を提供する専門の相談員

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・相談者のニーズを把握し、専門的な支援につなげる必要があると拠点内で判断した場合にはタイミングを逃さずに担当保健師につなげることができた。また、子育てサポートシステムから相談につながるケースも増え、連携して見守る体制を取るなど、拠点の機能を活かした対応ができた。
 ・フードパントリーイベントにほぼ毎回従事することで、ひとり親の方や拠点を利用したことがない方とかかわることができ、情報提供したり相談を受ける機会になった。

(課題)

・子育てパートナーが出張相談に出向いた時だけでなく、地域の支援関係者の方からタイムリーに相談してもらえるよう、子育てパートナーの役割の理解促進を関係機関の定例会等で働きかけることが必要である。
 ・保育園・幼稚園の入園に関する相談から、課題として捉えたことや相談者の悩みの要因となっていることを保育・教育コンシェルジュと共有し、資源の調整や必要な支援の充実等の課題に取り組んでいく必要がある。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。